

「はあ、はあ、はあ。ぎりぎり、セーフか」

淳が水に襲われるほんのわずかな時間の前に、水の龍が壁を破り、部屋に入ってくる。そしてその龍は淳を襲おうとしている水と激しくぶつかり合い、水しぶきを大きく撒き散らした。

龍が通ってできたのであろう壁の大きな穴から、黒いスーツを着たオールバックの男が入ってくる。先ほど淳とぶつかった男だった。男の手には奇妙なことに漫画が握られており、そして先ほどとは違い、サングラスを取っていた。そう、その顔を見れば一目瞭然であろう。彼は慎であった。

慎はすぐにあたりを見回し、状況を把握する。そして周りの警戒を一切緩めず淳に近づき「おい、淳。大丈夫か。おい、淳！」と淳の体を大きく揺らす。しかし反応は返ってはこず、淳はぶつぶつと何かをつぶやくだけであった。

「ち、まさかお前がここにいたとはな、赤い死神」

「てめえ、昨日の」

いつの間にか覆面を取っていた男は、確かに昨日慎を襲っ

た男であった。慎は昨日の出来事を思い出すが、そんな事はすぐに棚に置き、「よくも、俺の生徒を」と怒りに身を焦がした。

「なぜ貴様がここにいる？」

「うるせえよ」

慎の様子から「まったく、会話にならんな」と判断した男は、しかし彼がここにいるということは、ということから部下は全員やられ、作戦は失敗したということを理解した。ならば後はここからなるべく早く撤収するだけだと判断し、その部屋から外側に向かって思い切り水を飛ばし、船に穴を開けて脱出経路を確保すると、「では、さようならだ」と男は水がどぶどぶと入り込んでいるその穴へ向かって歩き始める。

当然、「までよ。逃がすと思っているのか」と慎はこれを追おうとするが、「フン」と表情を一切変えずに鼻で笑うと、淳に向かって先ほど船に穴を開けた勢いと水量で、否、先ほどあけた穴から入り込んでいる水も使っているのか先ほどよりもさらに多くなつた水量を飛ばした。

「ち」

慎は瞬きの間もないほどの時間で淳を回収し、何とかこれを回避する。しかしその瞬間、男は穴をくぐって海の中に消え去ってしまった。

ただでさえ昨日の傷を回復したせいで精神エネルギーがほとんどない慎は、水の中では漫画がぬれてしまい自身の力が出せないと判断し、彼を追うという暴挙はしなかった。だからすぐに淳のことに頭を切り替え、「おい、淳、淳！」と呼びかける。だが、淳の意識ははまだ彼方へ飛んでいったままであった。

僕は、だめだ。

僕は、ああ、

僕は、

僕は！

弱い……

「淳！」

慎の何度目かの叫びで淳はようやく「はっ」と気がつく。

「慎、せんせえ」

しかし彼の精神はもはや崩壊寸前であり、そんな感情は涙となりまぶたにたまり、すぐに決壊した。

「あ、あ、ああああ。僕は。僕は！」

「大丈夫だ、大丈夫だよ。もう」

慎は大声で泣き叫ぶ淳をきつく抱きしめ、頭をなでて何度も何度も大丈夫だと声をかけるのだった。

「はあ、ようやく終わった」

慎はため息をつき、腕時計を見ると、もうすぐ夜中の12時を回ろうとしていた。

「なんだか最近、夜遅い用事ががおおいな」

慎がいるのは警察署の前。なぜこんなところにいるのか、理由は至極簡単で、今日起こった豪華客船ジャック事件の取調べだった。

慎はこれまでに取調べというものを受けたことがないわけではなかったが、しかし、今回はそこに集まっていたのが各国の超大物クラスだったこともあり、取調べにも相当力が入っていた。特に犯人グループをみた慎は、同じく犯人グループをみた淳が取調べを受けられないくらい精神的に参っていたため、他の誰よりも多く取調べを受けていた。

ざっと10時間。ほとんどぶっ通しで行われ、19時に食べたカツ丼はもうすでに消化されていた。

「腹減ったな。ああ、ラーメン食べたい」

慎が「もう行きつけのラーメン屋も、最寄の駅に着くころにはしまっているよなあ」と何度目かのため息をついたとき、彼のポケットにしまっていた携帯が鳴った。携帯はバイブモードにしてあったため、鳴ったというよりは震えたといったほうがこの場合正しいが。

「はいはい、もしもし」

『あ、慎さん』

かけてきたのは、昨日も情報をくれた彼の友人の情報屋だった。携帯の画面に名前が出ていたからその声を聞いても驚

きもしなかったし、何よりも疲れていたため慎は「はいはい、なあに」と薄いリアクションで返した。

『もう、取調べは終わったのかい？』

「今日の分はな」

『その言い方だと、まだまだ日を改めて行われるみたいだね』

「ああ。もういやになる」

しゃべりながら歩いて駅を目指すが、しかしここはあの豪華客船の停泊していた港近くで、土地勘がない。「ああ、警察署で駅の場所を聞き忘れた」と慎はいまさらながら後悔した。

『一応、僕のほうでもいろいろ調べてみたけど、今聞く？』

情報屋のこの言葉に「お、いつもながら早いな」と感心しながら、慎は「そりゃ、聞きたいさ」とうなずいた。

『分かった。でも、まだ事件が起きてから時間もたっていないし、軽く調べただけだから誤情報も混ざっているかもしれない。だから慎さんの口から、今日の出来事をざっと話してくれないかな。情報の真偽をある程度確かめたい。やっぱり、

当事者の口から聞く情報は、他のどれよりも確実だからね』

「ああ、いいよ。じゃあまず昨日の話からだな」

「昨日、という言葉に情報屋は「昨日って事は、昨日のあのことも関係していたんだ」と反応する。慎は「まあ、あせるなよ。とりあえず、俺に話をさせてくれ」と苦笑して、そして語り始めた。

　　ファイグネリアに昨夜のことをようやく話し終える。慎にとって、自身の油断という大きなミスを犯したという恥を語ることになるため少し話しづらい内容ではあったが、しかし今ある状況を何とかせねばなるまい、ということからためらいなく語った。

　　今ある何とかしなくてはならない状況。

　　つまり、昨日慎を襲い、さらに「今日さえ慎がいなければいい」と言うリーダーの言葉を真に受けるのならば、彼らがこの船で何か一波乱起こそうということは容易に想像ができたからだ。

フィグネリアは慎の話聞き終えて、「まあ、そんな事が……」と口に手を当てて驚く。慎は「ああ」とうなずくと、「だから今日、ここが狙われる可能性は低くない」と語った。「では、どういたしましょう?」

「敵は俺がこの船にはいないと思っているだろう。実際、俺も今ここにるのが信じられないくらいだからな。故に、それを逆手に取る」

「ふむふむ、一体どのようにして」

「俺がお前のボディガードに紛れ込む」

慎のこの提案にフィグネリアは「まあ」と目を丸くする。

周囲にいたボディガードたちは慎のこの発言が自分たちのことをまるで使えないという言い方であったと思い、「ふざけるな! 我々は数多の訓練をつんだエキスパートだぞ!」と憤慨した。しかしフィグネリアはこれを収めさせると、「わかりました」とにこりと笑った。ボディガードたちは「な、ですが」と食い下がったが、「では、そのように」と言うフィグネリアの言葉に、さすがに雇い主の言葉には逆らえないのか、舌打ちをするだけでそれ以上は何も言わなか

った。

フィグネリアのボディガードにつれられ、慎は更衣室に来ていた。無論理由は慎もボディガードの服を着て変装するためである。

更衣室に着き、部屋に入る。そして強面のボディガードは慎に黒いスーツを渡す。慎もこれを当然受け取ろうとするが、その瞬間、ボディガードはすつとスーツを自分のほうに引き、それを阻害した。慎はボディガードのほうを見やるが、目が合うと彼は慎をにらみつけた。

「いい気になるなよ。お嬢様のお友達だかなんだか知らんが、素人風情が」

この言葉に慎もくるところがあったのか、言葉を強めて「なんだと。風情かどうか、試してみるか」と睨み返した。少しの間、二人はにらみ続けていたが、ボディガードは「フン」と慎にスーツを軽く投げ渡すと「俺たちの邪魔はするなよ」と更衣室を出て行った。

「感じの悪いやつだ」

男が出て行ったのを確認し、慎は時計に目をやると、もうそろそろ結婚式の開始時間が迫ってきており、あわてて着替え始めるのだった。

結果的に結婚式は滞りなく終わった。

絶対に来ると思っていた昨日の輩も来る気配は見せなかったため、慎はほっと胸をなでおろしたが、彼の脇の、毎度突っかかってくるボディガードが「来なかったじゃないか」と鼻で笑ってきたため、そんな安心感はどこかへ吹き飛んで怒りの感情がわきあがった。

「ふん。馬子にも衣装とはこのことだな」

するとそこへ、司がやってきた。事前に慎が紛れ込んでいと聞いていた司は慎を見つけるとそうつぶやいた。慎は先ほどのことからストレスがたまっていたため、「ああ？」と司にすら食って掛かったが、「さあさあ、ご挨拶周りに行きましょう」とフイグネリアが司を引っ張って行ってしまっ

たため、慎は「ああもう」と行き場を失った感情をもてあましながらその後を付いて行った。

「げ」

あいさつ回りはそこまで楽しくなかったため、慎はついといそばにある食べ物に目が行ってしまう事が多かった。脇にいるボディガードに「おい、なにやってんだ」と肘でたたかれたが、しかし嗅覚を刺激するこの甘美なおいにおい思わずよだれが何度もたれそうになった。

しかし気の抜けない事態に遭遇した。いつかは来ることだと思っていたからある程度は覚悟していたが、しかし実際に来て見ると冷や汗ものであった。

そう、あいさつ回りの順番が、優希たちのところまで回ってきたのである。

一応変装をしてあるとはいえ、そんなものはサングラスと髪をオールバックにした程度だ。正体がばれる可能性なんていくらでもある。

敵をだますにはまず味方から。さらに昨日、慎は畏にかかったという他人にはなるべく言いたくないこともあったため、正体がばれるのは感情論を入れても抜きにしてもいいことではない。

「とにかく、影に徹しておけば大丈夫か」

慎はそんな考えから一言も発せず、びしりと背筋を伸ばすことのみ集中した。

「ひよっとして、だけど。慎がどこにいるか知ってる？」

心臓がどきりと大きな鼓動をあげた。冷や汗がだらだら流れてくる。慎は必死に冷静を取り繕うとするが、しかし、反面、もうばれてしまっているのではないかと言う心の声が絶えず響いた。

「ああ。あいつならさつき会った。急いでトイレに向かってたみたいだから、そこまで多く話していないがな」

司がこっちを振り向きにやけてくる。慎はもう心臓がのどから飛び出そうで、「もうだめか」と目をぎゅっつつぶったが、しかし優希は「へえ、そっか。彼、もう来てたのか」と言って納得した様子を見せたため、慎はほっと胸をなでおろ

した。

司が再びこちらを向いて肩をすくめるのを見て、慎はもはや怒りを通り越してあきれの境地にたっていた。

ようやく話が終わり、と言うよりも時間的に終わらざる終えなくなり、優希たちの前から去ることができるようになった。

慎はほっと一息つく。しかしこのために一瞬周りが見えなくなってしまうため、ドン、と誰かにぶつかった。とっさに謝ろうとしたが、目に映ったのは淳であった。

「やべえ」

慎は謝罪の言葉をかろうじていったん飲み込み、そして何とか声を変えて「と、すみません」という。

淳が「あ、いえ」と頭を下げるのをみて、慎はそそくさと司たちの後についていく。

「あれ、今の声、どこかで聞いたことあるような」

淳のこの言葉に、慎は「ばれるな、ばれるな。ばれるな！」と心で何度も祈るのだった。

バチン

「なんだ？」

突如、電気が消えあたり一面が暗闇に包まれた。

慎はかけていたサングラスをさっと取り外す。それは仕様なのか、それとも先のボディガードの嫌がらせなのか、彼のサングラスは非常に暗く、見づらいものであった。しかし、災い転じて福となす。それが項をなして、サングラスをはずした瞬間、慎はすぐにあたりの様子をうかがうことができた。他のものは皆、目が見えずあたふたしている。パニックになるのも時間の問題であろう。しかし、それ以上の問題が存在していた。

あたりに覆面をかぶったなぞの、否、スーツを着ていることから他のボディガードに紛れ込んでいたことの分かる何十人ももの者たちが、あたりのVIPたちになにやら怪しげなもの、覆面たちはそれをさっと抱きかかえる。失い、覆面たちはそれをさっと抱きかかえる。

慎はピンと来て、ファイグネリアのほうへ振り返る。予想通

り、ファイグネリアも同様の目にあっていた。慎は彼女をすぐに助けようと跳躍しようとしかけるが、闇世の中にさしこまれた光に気がつき、そちらへ目を向けると、出入り口の扉の近くの覆面がもうすでにその場を後にしようとしかけていた。慎はすぐにこれを追いかける。ファイグネリアが連れて行かれるのも今まさにその場を連れ去られた彼ら彼女らと同じ場所であると分かったからだ。

ポケットから漫画を取り出すと、慎は瞬きの間もないわずかな時間で扉へとたどり着く。会場を出ると三つの廊下にくわすが、覆面たちはすべて右の廊下へ向かっていた。その道は少し長い間一本道であり、故に先回りができる。だから慎は一瞬考えた後、真ん中の道を通り、そして彼らを先回りした。

「な、なんだ。貴様」

「よお、遅かったじゃないか」

果たしてこの作戦はうまくいき、慎が先回りして待ってい

ると、しばらくして何人もの人間を抱きかかえた覆面たちが走ってきた。

「いや、まてよ。その顔、まさか貴様赤い死神か」

「ご名答の、ご明察っ」と

慎は言い終わる前に覆面たちに飛び掛る。彼らも彼らでさすがと言うかやはりと言うか、なかなかの実力の持ち主であり、中には能力者らしき人物も数人いた。いくら慎がいないとはいえ、今回の式の主賓の一人はあの司だ。敵もかなりの精鋭で来ていたのであろう。しかし、彼らは人を抱えているという身動きしづらいハンディを負っており、それを慎は見逃さず、即効でけりをつけた。

「一昨日きやがれってんだ……。あ、昨日きたのか、こいつら」

慎は昨日の今日で精神的疲労がかなりたまっていたが、だからこそ最初から全力でぶつかると、一瞬で終わらせると、「ふう」と一息ついてその場に座った。

「後はまあ、追ってくるやつらにでも任せればいいかな」

ドン！

「な、なんだ」

慎が張り詰めていた気をようやく落ち着かせた瞬間、大きな衝撃音が鳴り響いた。その音は重く低く鳴り響き、まるで何か重いものが壁に衝突したような音であった。

慎はすぐにまた気を張り巡らせ、そして手に持っていた漫画のページを切り替えた。そして所定のページを開き、透視能力を使って音が発生したであろう場所の様子を伺い始める。

分かってしまえばなんてことはない。どうやら優希が扉を破壊したようだった。そういえば、さっきの能力者で物体を固める能力者がいた。きっとその能力者のせいで扉が固められたのだろう。それを優希が壊したということか。

慎は理解するとはあ、と胸をなでおろして再び力を抜いて休まろうとする。

だが、透視能力を切る直前、とんでもない光景が目飛び込んできた。

淳が倉庫で大柄の覆面と対峙している。

「だめだ、淳！ そいつは」

しかし大きな問題があった。淳の飛ばす水がすべて男の前で静止している。

「気付け、淳！ お前じゃそいつにはかなわない」

そう、慎はその情景を見て理解した。男の能力が淳と同じ、水を操るということに。

能力が同じであるならば、実力の差ははっきりと出てきてしまう。物質操作系であればなおのことだ。さらにこの光景から見ればもっと恐ろしいことが分かる。淳の操っている水をすべて男が奪い取っていた。本来、同じ物質を操る操作系能力者同士では先に操っていたものを奪い取ることはできない。その物質は、先に操っていたものとのリンクを完全に形成してしまっているためだ。

だがしかし、そのリンクをも打ち破るほど強力な能力者ならば話は違う。

そう、つまりは……。

その男は淳よりも数段、否数十段は上の実力を持っている。

そしてその場合、勝つ術は

ない

勿論完全にはないわけではない。究極的に言ってしまうえば、能力を使えない状況であると考えてしまえばいいからだ。つまりは能力を使わないで勝つ方法を見つけてしまえば、勝つことは不可能ではない。不可能ではない。だが、あくまでゼロではないというだけだ。さらには淳は能力を使わないで戦う方法を知らない。

「やばい。このままでは」

慎は歯をかみ締めると、残った力を振り絞り

「蒼龍光臨」

人のサイズをゆうに超える巨大な水の龍を作り出す。

そして慎が念じると龍は一直線にすべての障害物を破壊して突き進んだ。

たとえ壁であつても。

たとえ家具であつても。

たとえ、それがどんなものであつても水の龍の進む道を拒むことのできるものは何人たりとも存在しなかった。

「そして俺は淳を何とか救うことができた。だが、敵さんにはまんまと逃げられちゃったのさ」

『なるほどね』

慎は情報屋にそこまで話し終えると、自動販売機を見つけた。話しつかれてきてしまつて、のどが渴き始めていたため、ポケットから財布を取り出してお札を入れる。しかし何度入れてもお札は帰ってきてしまい、いらいらしながらよく見てみると「お札中止」のランプがともっていた。

「はあ」

『ん？』

「いや、なんでもない。ともかく、それでやつは逃げおうせた。さらに厄介なことに、他のやつらも逃げ出していたのさ」  
『どういうこと？ 他のやつらは確か君が全員のしていたんだらう？』

「狸寝入り、だったんだよ」

慎はようやく他の自販機を見つけ、お札を入れる。今度は

お札中止の言葉は見つからず、ほっと肩をすくめた。そして炭酸飲料のボタンを押すと、ガランと缶が落ちてくる音が聞こえた。

『つまり君がのしていたと思っていたやつの中に、本当は気絶していなかったものがいた、と』

慎は缶を開けると一口のみ、そして「ああ、そうだ」とうなずいた。

「そして俺が淳のほうへ向かった隙を突いて逃げ出した」

『ちよ、それ、まずくない？ だって彼ら、人質を持っていったんだろう？』

「ああ。だがすでにやつらの近くに優希や司が迫っていたからな。もはや人質にかまっていられる状況じゃあなくなったんだろう。すたこらさつつさと人質をおいて逃げていったとさ」

慎は二度三度缶に口をつけ、続ける。

「まあ、やつらは人質を一人も奪えず消え去った。それはいい。問題は船と淳だった」

『淳君は分かるけど、船はどうして問題なんだい？』

「船に大きく穴が開いていたからな。俺も精神エネルギーが残ってれば、何とかこれをふさげたかもしれないが、空っぽだったしな。ま、そういった能力を収録している漫画をその時持つてなかったから、結局はダメだったって落ちはあるんだけどな。そんなわけで船はどんどん沈んでいきます」

慎は缶を持つ手とは逆の左手を頭の近くまで持ち上げ、ゆっくり下げていくことで沈むということをジエスチャーした。相手は見えていないから意味がないが。

「そしてそれからはみんなで救命ボート行きさ。俺も何とか淳を背負ってボートに乗り、救助を待った。幸い、すぐに救助隊は駆けつけてくれて、みんなは無事でしたとさ」

『でも、淳君は』

「ああ。体の傷のほうは春菜が何とかしてくれたんだが、心がな」

いい終わると自分の言葉の意味することに腹が立ち、慎は空っぽになった缶をグシャリとつぶした。

「今日のところは家に帰した。だが、これからが問題だろうな」

『うん、そうだね。僕にできることがあったら、何でも言うてね』

「ああ。ありがとうな。じゃあな」

慎はつぶした缶を自販機の近くのゴミ箱に入れ、そして肩ではさんでいた携帯を手に持ち替え、切ろうとする。すると情報屋が『あ、まってまって。今日のことについて僕が調べたこと、聞かなくていいの』とあわてて言ってきたため、慎は「いけね」と切りのボタンを押しかけた手をあわてて引っ込めた。

「そ、そうだったな。じゃあ、まあよろしく頼むよ」

『了解。まずじゃあその覆面達の正体からだね』

慎はごくりとつばを飲み込む。

『彼らははっきり言ってしまうえば決まった名前はない。でも

一応呼ぶならば、「ルー』』

「「ルー」？ なんだそりゃ」

『「ルー」って言うのはケルト神話の太陽や光の神のことだよ。彼らは彼らにとって神に等しいただ一人の人間をあげめで、そして自分たちの組織のことを彼にあやかっってそう呼ん

でいる』

「ってことは、その長って光を操るやつなのか？ そんな能力者聞いたことがないが」

慎は比較的、人の名前を覚えるのは苦手であったが、しかしだからと言って覚えられないわけではない。特に光を操るなんて覚えやすい能力者のことは忘れるとは思えない。故に慎は「だれだよ、光を操る能力者って」と問うた。

しかし、『ちがうよ、慎さん』と情報屋は否定する。

『彼らがあがめているのは光を操る能力者じゃあない』

「じゃあ、一体誰だよ」

『橘明。『殺戮の橙』さ』

その名前を聞き、慎は「な！」と驚きをあらわにする。さすがに夜だったから声を出すのは何とか抑えたが、しかしその驚きは隠すことのできるものではなかった。

『『殺戮の橙』。だから太陽の神、『ルー』か』

『その通り』

「そういえば、初夏に起きた淳と雄二の誘拐事件を起こしたのもやつを信仰するくさった宗教集団のものだったな」

『先に言われちゃったね。その通りだよ。しかも犯人は完全に前回と同じみたいだ』

「マジかよ」

だとしたら理由は簡単に説明が付く。超大物級の要人たちを何人も人質にとって彼らが成し遂げたかったこと。そう、それは……。

「狙いは橘明の開放か」

『たぶんね』

確かに橘明は今獄中の中だ。それもとっておきの。

「だが、懲りないやつらだな。以前、失敗しただろうに」

『失敗って言うと貴方が先生になってからすぐにおきたあのテロ事件のことかな』

「ああ。そうだ」

記憶がよみがえる。あのテロ事件。

慎が記憶をたどっていると、情報屋は『まあ、それも仕方ないんじゃないかな。彼らは系統が別だし』と気になることを口にした。

「系統が、別？」

『うん、そうだよ。あれ、ひよつとして言っただけでなかったかな。』

彼らは5つのグループ、と言うより長からなるんだよ』

慎はようやく駅に着くが、しかもはや終電には間に合わないときらめ、駅前広場のベンチに腰掛けた。あたりにはほとんど人がおらず、静かな夜であった。

『知将、暴君、老子、武士、そしてもう一人。彼ら伍皇と呼ばれる五人が橘明のもとに集い、そして独自に組織を作った。一応、それらの組織はすべて橘明の名のものに集った人々をまとめているから全部同じとされているけど、橘明自身が運営しているわけじゃあないからね。だから伍皇はそれぞれの組織をそれぞれで運営しているんだ。だから決まった名前はない。と言うよりも、誰の下で働いているかによって名前が変わるんだ』

「そして今回はそのうちの『ルー』ってわけか」

『そう。そしてそれを束ねるのは『暴君』。伍皇の中でも一、二を争うほどの武闘派として知られている』

「暴君、か」

だからあんな人を傷つけるような戦い方を。慎は心のうち

から怒りがこみ上げてくるのを感じる。それを何とか抑え、

「で、学校をテロったのは？」と問うた。

『ああ。それは知将の組みたいだ。コイツは厄介だよ。何を考えているのかよく分からないし、奇策ばかり打ち出してくる。とらえどころのないやつさ。ちなみに、知将のグループが自分たちをなんて読んでるか聞きたい？』

「興味ねえよ。そもそも、暴君の組織がなんて名前かも忘れたよ」

『少し勘違いしているみたいだから言っておくね。彼らは5つの組織の体系はとっているけど、実際は橘明を信仰する一つの組織だ。だから呼び名が違うだけで、それがさしている意味は同じだよ』

「なるほど、よくわからん。そもそも、何で一つの組織が5つの組織になってるんだよ」

『だから、橘明が組織を取りまとめないからだよ』

「それが分からないってんだ。だって橘明の組織なんだろう？」

『いや、違うよ。橘明という『最強』の名を信仰する者たち

が勝手に集まっているに過ぎない。橘明からすればそれはただ自分のもとに勝手に集ったやつらに過ぎない。君も橘明のこと、うわさくらいなら聞いたことあるだろ。彼は組織を運営するとか、誰かの上に立つとか、そんな事に興味はないんだ。彼が興味があるのはたった二つ』

「自身が最強だということと、強いやつとの戦いか」

慎は大きくため息をつく。確かに橘明は圧倒的に強いと聞く。それこそ、最強の名が本当の意味でふさわしいくらいに。そして強いものに惹かれる気持ちも分からなくはない。だからと言ってそれが免罪符になるわけは決してない。決してないのだ。

「なあ、どうしてやつらは好き勝手するかな」

『彼らにとって、正義なんてものはないからね。いや、と言うよりも「強さこそが正義」ってことかな』

「強さこそ正義、か」

『強さこそが絶対。橘明自身もそう言っている。彼らにとってそれ以上もそれ以下も、存在しない。強いものこそが絶対のルールなんだ』

「だから、強ければ何でもやっていいってか」

『彼らとしては、もっと、だろうね。強ければ、何をやってもどころか、弱いものは生きる資格すらない、って。だからこそ、彼らは橘明という最強をあがめる』

「それは正しいかもしれない。だがそれは」

そうだ、それは

「強いものの理屈でしかない」

『そうだね』

慎は携帯を握り締める。壊れてしまいうくらい強く。

だったらなんだって言うんだ。

弱いやつは生きる必要がないって言うのか。

弱いやつは、生きてちやいけないうって言うのか。

ふざけるな！

だから淳はあんなに傷ついて、心に大きな怪我までおって。

ふざけるな！

絶対に、許さない。

そう、絶対にだ！

「慧、もしも他にも情報が……」

『皆まで言わなくっても、わかってるよ』

「話が早くて助かるよ」

情報屋は『じゃ、もしも他にも情報が入ったらすぐにまわすね』といって電話を切った。

慎は切れた電話のディスプレイを少し見て、そしてそれをポケットにしまい、当てもなく歩き始める。高ぶる感情を、何とか抑えるために。

「いいさ。橘明。お前が過ちを生み出す権化だというのならば……」

俺が、お前を……